

ディケンズの後期「短編小説」(1)

村田 信行

Dickens' Short Stories in His Late Period(1)

Nubuyuki Murata

初期・中期・後期に分けられるディケンズの short stories（短編小説）について、後期の前半をまとめる。中期に人気を博したクリスマス作品は質を十分維持できなかったものの、自ら編集する月刊誌を舞台に、多くの共同執筆者も抱えながら、最晩年まで間断なく量産された。ジャーナリスティックな背景、短編としての制作方法、実生活での出来事などのかかわりから、後期の short stories を概観する。

キーワード： ディケンズ 後期 短編小説 雑誌編集 クリスマス

この論文は、「ディケンズの初期短編小説」「同 (2)」「ディケンズの中期短編小説」を引き継ぎ、初期・中期・後期の3つに分けられるディケンズの「短編小説」(short stories)について、後期の前半をまとめるものである⁽¹⁾。「短編小説」をめぐる時期区分を改めて挙げる。

- I 初期 (1833-40)： 雑誌『ハンフリー親方の時計』で本格的に分冊形式の長編に手を染めるまで、精力的に数多くの stories を書いた。
- II 中期 (1840 年代)： ディケンズ本人が大衆は short stories を望んでいないと考えて、クリスマスの作品以外ほとんど書かなかった。
- III 後期 (1850-68)： 自前の2つの雑誌を中心に、再びかなりの数をこなした。

クリスマス5作品の成功とクリスマスという特別な市場の需要は、後期にも引き続きディケンズにクリスマスものを執筆させることになった。デボラ・E・トマスの言うように⁽²⁾、七面鳥も量が多すぎれば飽きてしまい、素敵なクリスマスのお話も数が多すぎれば飽きられてしまう。一部を除いて、必然的に多くの作品は金儲けのお粗末なものとなり、クリスマスの名を語っただけのおざなりなものも多かった。ディケンズは1850年から1867年にかけて、自ら編集長を務める『家庭の言葉』(*Household Words*, 1850-59)、『一年中』(*All the Year Round*, 1859-70)において、毎年必ず12月にクリスマス特別号の中に作品を発表し続けたが、後に『クリスマス・ストーリーズ』⁽³⁾という名前で出版されたものの、その名は誤解を招くもので、クリスマスという特別な季節だけに現実を忘れ物語の世界に浸って本来の人間性を取り戻すという当初の意図をいささか逸脱した、ディケンズ晩年の技巧性を見せようとした作品も多い。クリスマスものとしては不十分で、看板に偽りありのせいもあって、後期のクリスマス特別号の作品群はかなりの数が忘却のかたへ追いやられているのが現状である。

クリスマスものを含めてディケンズの short story の歴史をなぞるのに、ジャーナリストあるいは雑

誌編集者としての活動を考えないわけにはいかない。「ディケンズの初期短編小説」「同 (2)」では十分触れなかったこの点についてまとめた⁽⁴⁾。まずディケンズが世の中に打って出たのは 1832 年 20 歳のとき、母方の叔父ジョン・バロー (John Barrow) が創刊していた『ミラー紙』(*The Mirror of Parliament*, 1828-41) で議会報道記者となり、速記術も駆使して頭角を現してからだった。当時イギリスは選挙法改正に揺れる激動の時期で、議会報道記者の正確性と機動性が注目を集めていた。それでも議会開会に影響される生活は不安定で、活動の範囲を広げて 1834 年 8 月に有力日刊新聞『モーニング・クロニクル紙』(*Morning Chronicle*, 1769-1862) の報道記者になった。『モーニング・クロニクル紙』は『タイムズ紙』(*The Times*, 1785-) に追いつき追い越せとばかりに、当時一日 1000 部から 6000 部まで部数を伸ばしつつある新進の日刊紙であった。自由主義を強く主張する編集長ジョン・ブラック (John Black, 1783-1855) と社主でリベラル派国会議員ジョン・イーストハウプ (Sir John Easthope, 1784-1865) に支持されながら、若きディケンズは報道記者ばかりでなく物語執筆にも取り組み始めた。

ディケンズは名を売り出した政治報道の世界にはそのまま突き進まなかった。『ミラー紙』時代 1833 年 12 月に初めての作品(story)「ポプラ小路の晚餐会」(*A Dinner at Popular Walk*) を部数 600 余りの小雑誌『マンスリー・マガジン』(*Monthly Magazine*, 1796 創刊) に投稿し、掲載された。初めての短編集『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*) に含まれている 9 編がこの雑誌に投稿された。天性のジャーナリストでもあるとともに、すでに天性の作家でもあったと言えるだろう。引き続き『モーニング・クロニクル紙』および 1835 年に創刊された姉妹紙『イブニング・クロニクル紙』(*Evening Chronicle*) を中心に数十編が投稿され、22、23 歳とは思えない熟練の筆遣いでロンドンの多彩な風物と人物観察をスケッチ(sketch)として描写し、批評家たちから高い評価を受けた。これら全 56 編をまとめて 1836 年に『ボズのスケッチ集』が出版された。

1836 年 12 月 24 歳のとき、別の雑誌に『ピックウィック・クラブ』の連載を始め人気急上昇の気配のさなか、当時の大出版会社リチャード・ベントリー・アンド・サン (Richard Bentley & Son) から新しい月刊雑誌のオファーを受け、編集長となった。『ベントリー・ミセレニー』(*Bentley Miscellany*, 1836-68) である。大変な出世であったが、このときの契約がしばらくの間彼にとって厄介なものとなった。編集とともに、作家として毎月 16 ページ分の文章を執筆すること、そして 3 巻本の小説を 2 本分原稿を一括渡すという契約であった。このときすでに、マクロン社(Macrone)にも小説を 1 本分 3 巻本として原稿を一括渡す契約もしていた。ディケンズの主な発表形式は、ご存知のとおり 20 冊分 冊月刊方式である。この時期の契約は膨大な量であるとともに、一括原稿である点が問題だった。ディケンズのジャーナリスト的才能は、読者の反応を見て筋を臨機応変に動かして行ける点にあり、リアルタイムの読者との関係が必要不可欠であった。うなぎのぼりの人気とそれに見合わない契約内容のために、双方の不満や軋轢は、『ミセレニー』の編集長をディケンズ自らが強引に別の作家に譲る 1839 年 1 月まで続いたと言われる。それ以降のディケンズは、人気作家の地位も得て、次の『ハンフリー親方の時計』(*Master Humphrey's Clock*, 1840-41) 時代を含めて、契約に縛られずに作品を書く自由を得たことになる。

一方、拙論「ディケンズの初期「短編小説」(2)」で述べたように⁽⁵⁾、『ハンフリー親方の時計』での試みがうまくいかなかったために、1840 年代のおよそ 10 年間 short story には興味を失っていたように見えるが、一方で、1846 年 1 月には『デイリー・ニューズ』(*Daily News*, 1846-1930) という日刊紙の初代編集長となった。資金力のあったこの日刊紙を舞台に、折からの不況の中、自由主義・自由貿易を支持し、単なる階級対立でなく、国民の相互的な福祉を念頭に急進改革を志向しようとしたが、出版元のブラッドベリー・アンド・エヴァンズ社(Bradbury & Evans)、あるいは当時鉄道王と呼ばれていた

ジョージ・ハドソン(George Hudson, 1800-71)の影響および編集への介入により、嫌気のさしたディケンズは1ヶ月ほどであっさり編集長を辞任し、親友のフォースター(John Forster, 1812-1876)にその地位を譲ってしまった。世の中の資金力の恐ろしさ、不当な影響力というものに出鼻をくじかれた格好だが、このことは以降の編集者としての立ち居振る舞いに少なからず教訓を残した。

『家庭の言葉』を立ち上げたときには、そうした経験を生かして、所有権はディケンズが半分、出版社ブラッドベリー社4分の1、友人フォースター8分の1、編集補佐ウィリアム・ウィルズ(William H. Wills, 1810-80)8分の1など、大半を自分の影響下に置き、思い存分執筆できる態勢を整えた。24ページばかりの週刊誌だが、平均4万部前後、多いときには10万部を売る大成功だった。大半は外部の寄稿者をそろえたが、ディケンズは毎回いくつか執筆した。他の執筆者はもちろんディケンズの意図や趣向に沿うものに限定され、彼の修正が随時加えられた。執筆者の名前が出るのはディケンズ本人に加えてウィルキー・コリンズ(Wilkie Collins, 1824-89)やギヤスケル夫人(Elizabeth Gaskell, 1810-65)だけだが、今ではアン・ローリ(Anne Lohrli)の労作『家庭の言葉：目次、寄稿者一覧、そしてその貢献』により特定されている⁽⁶⁾。オリジナルの記事や作品により幅広い読者層に訴える雑誌をめざし、主には社会問題、特にロンドンの上下水道の衛生問題、教育問題、オーストラリアへの移住問題など幅広くトピックをタイムリーに取り扱ったが、部数ははだしに下降線をたどった⁽⁷⁾。原稿の採用基準は、面白く活力がありためになるものであった。彼の長編としては『辛い時代』(*Hard Times*)、ギヤスケルの『クランフォード』(*Cranford*, 1853)『北と南』(*North and South*, 1855)も連載された。12月のクリスマス特別号には、多くの無署名の寄稿者のほかに、彼がいつも書き下ろしの1編を掲載した。1858年妻キャサリンとついに別居することとなったが、その弁明文の多くの雑誌への掲載をめぐって、発行元のブラッドベリー社と争う羽目となり、翌1859年『家庭の言葉』を廃刊し、内容的にはそっくりの『一年中』を立ち上げた。

『一年中』ではさらに、所有権を自分と編集補佐のウィルズで固め、まったくの個人所有の雑誌となった。50年代、60年代の最後の20年間、ディケンズはshort storyの発表の場としてこの2つの週刊誌を活用した。これが、筆者の言う「後期」に当たる。2つ目の『一年中』でも発行方法はほぼ同じだったが、巻頭に有名作家の連載を持ってくるなど当時の一般的週刊誌の体裁に似て、文芸色を強めたといわれる。ディケンズ本人は『二都物語』(*A Tale of Two Cities*)『大いなる遺産』(*Great Expectations*)の連載のほか、後に『商用ぬきの旅人』(*The Uncommercial Traveller*)に収められる随筆、ルポルタージュなどのshort storyを数多く書いた。他の有名作家ではウィルキー・コリンズの『月長石』(*The Moonstone*, 1859-60)、『白衣の女』(*The Woman in White*, 1868)も連載された。もちろんクリスマス特別号も毎年出され、通常でも大変人気で10万部ほどの部数はさらに30万部にも跳ね上がった。こちらの寄稿者については、エラ・オッペンランダー(Ella Ann Oppenlander)の研究『一年中：記述式インデックスとその寄稿者一覧』に詳しい⁽⁸⁾。

「かなりの数が忘却のかたへ追いやられているのが現状」ながら、大衆の支持を受けて1850年から1867年にかけて『家庭の言葉』『一年中』において毎年必ず12月にクリスマス特別号の中に発表され、後に『クリスマス・ストーリーズ』という名前で出版された作品群についてわかりやすくまとめた⁽⁹⁾。クリスマス特別号の構成はさまざまで、ディケンズ以外の執筆者の名前は出されることは少なく、あくまでもディケンズ監修であることが重要であった。ときには10名におよぶ作家が分担して一連の話を作り上げることもあった。1850年の「クリスマス・ツリー」(*A Christmas Tree*)、1851年の「年齢とともに味わうクリスマスの意味」(*What Christmas Is As We Grow Older*)から1853年の「無名氏の物語」(*Nobody's Story*)まで6編は、40年代のクリスマス5作品の構成を踏襲し、炉辺で家族にま

つわる心温まる物語を思い思いに語る形式が取られているが、1854年の「7人の貧しい旅人」(The Seven Poor Travellers)からはディケンズが特別号の物語の枠組みを設定し、それに沿って何名かの作家が各部分の話を作り、ディケンズが手を入れるという体裁に変わった。1859年の「幽霊屋敷」(The Haunted House)では、登場人物7名が幽霊が出るという有名な屋敷に泊まりながら交互に幽霊の目撃譚を語るが、それらはいずれも登場人物の思い出や記憶にまつわる思い込みに近いものであったという物語である。ディケンズは導入部分「屋敷の人々」(The Mortals in the House)と1番目の話「若旦那Bの部屋の幽霊」(The Ghost in the Master B's Room)を担当している。大人数によるこういう構成は、クリスマスの連帯感と同朋意識を高めたいというディケンズの意図の表れであると言える⁽¹⁰⁾。クリスマス特別号に書いてくれた多くの作家の出来にディケンズは失望していたと言われるが、後に押しも押されぬ大作家となるウィルキー・コリンズだけは別格で、4つの作品で共同執筆している。1856年「ゴールデン・メアリー号の難破」(The Wreck of the Golden Mary)、1857年「イギリス人捕虜の危険」(The Perils of Certain English Prisoners)、1860年「海からのメッセージ」(A Message from the Sea)、1867年「行止まり」(No Thoroughfare)である。このほかにも、60年代には5回ほどディケンズは執筆を依頼したものの、自信をつけて独自色にこだわり始めたコリンズは断っている。そのせいもあって、クリスマス特別号の企画は1867年で終わりを迎えた。

「クリスマスものとしては不十分で、看板に偽りあり」と触れたが、そこにはディケンズの別の興味が表れていて、中には高い評価を受けるようになる作品もある。1858年の「社交界に出て」(Going into Society)は、チョップス(Chops)という小人の見世物小屋の芸人が宝くじに当たって、あこがれの社交界に出てみたはいいが悪い奴にいいようにだまされて、小屋に戻ってくるなり死んでしまうという哀れな話。1861年の「トム・ティドラーの地面」(Tom Tiddler's Ground)は、当時子どもたちの遊びの名前をタイトルと枠組みにして、実在した人物を基にモウプス(Mopes)という人間嫌いの隠者の思い上がりをも皮肉った話。1866年の「マグビー・ジャンクション」(Mugby Junction)では、その前半の4つのエピソードをディケンズは書いている。第1章、第2章「バーボックス商会」(Barbox Brothers, Barbox Brothers and Co.)の雰囲気は、「クリスマス・キャロル」(Christmas Carol, 1843)のような重厚さもなければ、夢のようなファンタジー仕立てでもないが、シンプルで朗らかで軽快なストーリーの中に、いかにもクリスマスの季節にふさわしく、ひがみっぽい退職したばかりの50男のジャクソン(Mr. Jackson)の生まれ変わりが描かれていて、すがすがしい。ところが、第3章「本線、マグビー駅のボーイ」(The Main Line: The Boy at Mugby)では、駅の軽食コーナーの品揃いの悪さとそこで働くボーイ(少年)を皮肉った軽めの話が挟まり、次の第4章「第1支線、信号手」(No.1 Branch Line. The Signalman)は一転独立して、非常に不気味な味わいを持っている。技巧性ゆえに評価もかなり高い作品で、大きな乗換え駅の切換えポイントの小屋に勤める男が、小屋の近くで亡霊のようなものを見かけると二度にわたって数時間後に大きな事故が発生する。話し手が信号手を訪ねたときにも男は亡霊を見るが、翌朝ふたたび話し手が訪ねたときにはやはり大きな事故が起きていて、機関車に轢かれた被害者はその信号手だったと知りぞっとするという幽霊物語である。内容的にクリスマスとは結びつかず、もはやクリスマスものとは言えないものになっている。

この唐突感は、ディケンズの初期の長編作品、たとえば『ピクウィック・クラブ』の中に挿入された、あらすじとは一見無関係で、かつ味わいもかけ離れた4つの作品を思い起こさせる。アル中の旅回り道化役者が廃人となり破滅していく陰惨な話「放浪者の物語」(The Stroller's Tale, 第3章)、刑期を終えた囚人が故郷へ帰って来ると家族の不幸が待っていた「囚人帰還の物語」(The Convict's Return, 第6章)、一人称の告白がぞっとするような狂気の話「狂人の手記」(A Madman's Manuscript, 第11章)、

そして仕返しとして義理の父親とその妻子を苦しめる男の復讐譚「奇妙な依頼人の話」(The Old Man's Tale About the Queer Client, 第21章)。いずれもひょうきんで軽妙なピックウィック氏一同の道中には不似合いだが、筆者が先行する論文で論じたように⁽¹¹⁾、ディケンズは「非日常の想像力の駆使」をねらって敢えて組み込んでいる。「第1支線、信号手」はそれゆえになおさら印象深く、気味悪さも格別である。

他に多少の印象を残し興味を引くものには、1863年「リリパー夫人の下宿屋」(Mrs. Lirriper's Lodgings)、1864年「リリパー夫人の遺産」(Mrs. Lirriper's Legacy)、1865年「ドクター・マリゴールドの処方箋」(Doctor Marigold's Prescriptions)などがある。リリパー夫人2作は下宿屋のおかみさんの一代記風のお話で、ディケンズらしい活発な明るいストーリーだが、短い割には出来事が詰まりすぎているせいか、やや盛り上がり欠ける。ドクター・マリゴールドはもっと人物描写が生き生きとしていて、ディケンズの代表的長編の有名な登場人物を髣髴とさせる躍動感がある。フーテンの寅さん張りの威勢がよくて人情家の旅回りの叩き売り商人だが、幼くして旅回り先で妻とともに失くした娘に代わって偶然のはからいで養子としてもらった聾啞の娘との交情、その娘の結婚と孫の誕生、その孫の発する「奇跡の声」の様子など、心揺さぶるいいお話となっている。ディケンズの公開朗読については十分な紙幅が必要で、簡単な説明で済ますことは難しいが、リリパー夫人やドクター・マリゴールドは総数わずか21本の朗読台本に含まれていた、言わばディケンズ選りすぐりの名文章、名登場人物である。

1853年に始まり、死の直前まで17年にわたって断続的に続けられた公開朗読は総数500回にもおよび、ディケンズ後半生のライフワークのようであった⁽¹²⁾。クリスマス作品、特に「クリスマス・キャロル」を発端に始まり次第にレパトリーを広げたが、21本のうち5本は実際には公開されなかった⁽¹³⁾。朗読は文学と同じくらいに古いとはよく言われることだが、ディケンズにとって朗読は特別の意味を持っていた。ディケンズの時代に文字の読めない人々がまだ多かったことは当然だが、ディケンズが大勢の人々に読んで聞かせる、あるいは登場人物になり切って乗り移ったように演じたのは、何もそのせいだけではなく、彼が大衆の反応とともに物語を作り、大衆を代表する登場人物の喜怒哀楽にこそ価値を置いていたからであろう。ヴィクトリア朝には朗読が主な娯楽の1つであり、それも啓蒙的、教育的意味合いにおいてとらえられていて、「ときに道徳的指針をひそめた、“安全な”気晴らし」⁽¹⁴⁾でさえあったと言われる。劇場の興業ではなく、集会所や学校を使った演壇での朗読に固執してはいたが、やはりディケンズは、同時代の大作作家や文人たちがこぞって開いた講演という形式よりは、直接大衆の反応を引き出せる朗読そのもの、それも演劇張りの一人芝居ともいえる公開朗読を好んだ。

公開朗読への思い入れは尋常ではなかった。親友のジョン・フォースターは朗読なる「低級芸」に現を抜かすのではなく、本業の「高級芸」なる小説に専念すべきだと、公開朗読には強固に反対していたらしいが⁽¹⁵⁾、ディケンズは実入りがいいこともあったろうが、本能的にと言っていいくらいに朗読への傾倒を続けた。それも、安い値段でより多くの大衆に聞いてもらいたいというのがディケンズならではの姿勢で、朗読の出来は聴衆の反応にこそ表れると考えた。会場の雰囲気、聴衆の様子に合わせ、アドリブ的に一つひとつの朗読を生き物のように作り上げた。朗読への傾倒は、若いころからの芝居好き、演劇好きと当然つながっている。大変多忙な作家生活にもかかわらず、1845年にはフォースター、歴史著述家ヘンリー・メイヒュー(Henry Mayhew, 1812-87)、挿絵画家ジョン・リーチ(John Reech, 1817-64)などの有名文人をまとめて素人劇団を結成し、言わばプロデューサーから監督、マネージャーまで一人でこなした。この劇団は、ヘイマーケット劇場(The Theatre Royal Haymarket)にて

女王陛下ご夫妻のご臨席まで得て『ウィンザーの陽気な女房たち』を演じたほどである。これらの朗読や芝居への傾倒はディケンズの体にダメージを与え、結果的に彼の寿命を縮めることになったが、彼の作家としての生涯や作品の質的評価をする際には、これまで比較的重要視されなかったきらいがあるが決して省けない特別な要素であろう。

クリスマス作品およびクリスマス特集号についてはあらかた触れたが、その他のディケンズ後期の stories について、のちには主に『商用ぬきの旅人』にまとめられることになる作品群については、次の論文にて分析を続けたい。

注と参考文献

(1) 筆者の論文「ディケンズの初期「短編小説」」（清泉女学院短期大学研究紀要第 8・9 合併号、1990 年）、「ディケンズの初期「短編小説」(2)」(同第 10 号、1992 年)、および「ディケンズの中期「短編小説」」(同第 31 号、2012 年) 参考。なおこれらの論文で説明したように、ディケンズの短い文章や作品については、短編小説という誤解を招く呼び方ではなく、story、あるいは short story(stories) という呼び方をする。

(2) Thomas, Deborah A., *Dickens and the Short Story* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1982), p.62.

(3) この論文で言及したり、ディケンズの経歴上無視できない著作については、長編作品とその英語タイトル、発表された雑誌の発行年、そしてディケンズが編集長を務めた雑誌とその英語タイトル、発行期間を年代順に挙げておく。

1836	『ボズのスケッチ集』 <i>Sketches by Boz</i>
1836-37	『ピックウィック・クラブ遺文録』 <i>The Posthumous Papers of the Pickwick Club</i>
1837-39	『オリヴァー・トゥイスト』 <i>Oliver Twist</i>
1838-39	『ニコラス・ニッケルビー』 <i>Nicholas Nickleby</i>
1840-41 (週刊誌)	『ハンフリー親方の時計』 <i>Master Humphrey's Clock</i>
1840-41	『骨董屋』 <i>The Old Curiosity Shop</i>
1843-44	『マーティン・チャズルウィット』 <i>Martin Chuzzlewit</i>
1846-48	『ドンビー父子』 <i>Dombey and Son</i>
1849-50	『デイヴィッド・カパーフィールド』 <i>David Copperfield</i>
1850-59 (週刊誌)	『家庭の言葉』 <i>Household Words</i>
1852-53	『荒涼館』 <i>Bleak House</i>
1854	『辛い時代』 <i>Hard Times</i>
1855-57	『リトル・ドリット』 <i>Little Dorrit</i>
1859	『二都物語』 <i>A Tale of Two Cities</i>
1859-70 (週刊誌)	『一年中』 <i>All the Year Round</i>
1860	『大いなる遺産』 <i>Great Expectations</i>
1860	『商用ぬきの旅人』 <i>The Uncommercial Traveller</i> (1860, 1865 に一部が、1875 に全作そろって出版)
1864-65	『互いの友』 <i>Our Mutual Friend</i>
1870 (未完)	『エドウィン・ドルードの謎』 <i>The Mystery of Edwin Drood</i>
1874	『クリスマス・ストーリーズ』 <i>Christmas Stories</i>

(4) ディケンズと雑誌記者としてのキャリアについては、植木研介「七 ジャーナリストとしてのディケンズ」(松村昌家編『ディケンズ小事典』研究社、1994) に詳しい。

(5) 筆者の論文「ディケンズの初期「短編小説」(2)」(清泉女学院短期大学研究紀要第 10 号、1992 年)、pp.107-09 参照。

(6) Lohrli, Anne, comp. *"Household Words": Table of Contents, List of Contributors and Their Contributions*. Toronto: University of Toronto Press, 1973.

(7) Bentley, Nicholas, et al. *The Dickens Index*. Oxford: Oxford University Press, 1988.

(8) Oppenlander, Ella Ann. *Dickens' "All the Year Round": Descriptive Index and Contributor List*. New York: Whitson, 1984.

(9) この論文で言及する『クリスマス・ブックス』および『クリスマス・ストーリーズ』中の各 story の英語タイトルと掲載雑誌名、掲載年を年代順に挙げておく。いずれも各年 12 月に発行されたクリスマス特別号に掲載された。タイトルの日本語訳は、いずれも『ディケンズ鑑賞大辞典』(南雲堂、2007 年)による。

1. 「クリスマス・キャロル」 'A Christmas Carol' (1843)

2. 「鐘の精」 'The Chimes' (1844)

3. 「炉辺のこおろぎ」 'A Cricket on the Hearth' (1845)

4. 「人生の戦い」 'The Battle of Life' (1846)

5. 「憑かれた男」 'The Haunted Man' (1848)

★以上 5 作品を一冊にまとめて出版されたのが『クリスマス・ブックス』 *Christmas Books* (1852).

以下、掲載された週刊誌名は、HW=Household Words 『家庭の言葉』、AYR=All the Year Round 『一年中』

1. 「クリスマス・ツリー」 A Christmas Tree (1850, HW)

2. 「年齢とともに味わうクリスマスの意味」 What Christmas Is As We Grow Older (1851, HW)

3. 「貧しい親類の物語」 The Poor Relation's Story (1852, HW)

4. 「子供の物語」 The Child's Story (1852, HW)

5. 「男子生徒の物語」 The Schoolboy's Story (1853, HW)

6. 「無名氏の物語」 Nobody's Story (1853, HW)

7. 「7 人の貧しい旅人」 The Seven Poor Travellers (1854, HW)

8. 「柵旅館 (ひいらぎ亭)」 The Holly-Tree Inn (1855, HW)

9. 「ゴールデン・メアリー号の難破」 The Wreck of the Golden Mary (1856, HW)

10. 「イギリス人捕虜の危険」 The Perils of Certain English Prisoners (1857, HW)

11. 「社交界に出て」 Going into Society (1858, HW)

12. 「幽霊屋敷」 The Haunted House (1859, AYR)

13. 「海からのメッセージ」 A Message from the Sea (1860, AYR)

14. 「トム・ティドラーの地面」 Tom Tiddler's Ground (1861, AYR)

15. 「何者かの手荷物」 Somebody's Luggage (1862, AYR)

16. 「リリパー夫人の下宿屋」 Mrs. Lirriper's Lodgings (1863, AYR)

17. 「リリパー夫人の遺産」 Mrs. Lirriper's Legacy (1864, AYR)

18. 「ドクター・マリゴールド」 Doctor Marigold's Prescriptions (1865, AYR)

19. 「マグビー・ジャンクション」 Mugby Junction (1866, AYR)

20. 「行止まり」 No Thoroughfare (1867, AYR)

★以上 20 編を一冊本として、ディケンズの死後出版されたのが『クリスマス・ストーリーズ』 *Christmas Stories* (1874).

(10) Nayder, Lillian. *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, & Victorian Authorship*. Ithaca : Cornell University Press, 2002. p. 131.

(11) 「ディケンズの初期「短編小説」(2)」(清泉女学院短期大学研究紀要第 10 号、1992 年)、pp.103-04 参照。

(12) ディケンズの公開朗読の事情や全体像については、『ディケンズ公開朗読台本』(英文社、2010)中の梅宮創造「ディケンズと公開朗読」がわかりやすく、最適の解説書である。

(13) ディケンズの行った公開朗読のレパトリーは興味深い。彼が注いだ労力を考えると、そのレパトリーは彼が自分の作品から自

ら選んだ「心揺さぶる場面ベスト20」とも言えるので、準備された時系列で明記しておく。*The Dickens Index* より。原作がわかりにくいものは、>の後に原作名を加えた。

1. A Christmas Carol 「クリスマス・キャロル」
 2. The Cricket on the Hearth 「炉辺のこおろぎ」
 3. The Chimes 「鐘の精」
 4. The Story of Little Dombey 「リトル・ドンビー物語」 > 『ドンビー父子』
 5. The Poor Traveller 「哀れな旅人」 > 「7人の貧しい旅人」(『クリスマス・ストーリーズ』)
 6. Boots at the Holly-Tree Inn 「ひいらぎ亭のブーツ」 > 『クリスマス・ストーリーズ』
 7. Mrs. Gamp 「ギャンプ夫人」 > 『マーティン・チャズルウィット』
 8. Bardell and Pickwick 「バーデル対ピックウィック裁判」 > 『ピックウィック・クラブ遺文録』
 9. David Copperfield 「デヴィッド・カパーフィールド」
 10. Nicholas Nickleby at the Yorkshire School 「ヨークシャー学校のニコラス・ニッケルビー」
 11. Mr. Chops 「小人のチョップス氏」 > 『クリスマス・ストーリーズ』
 12. Bob Sawyer's Party 「ボブ・ソーヤ氏のパーティ」 > 『ピックウィック・クラブ遺文録』
 13. Doctor Marigold 「ドクター・マリゴールド」 > 『クリスマス・ストーリーズ』
 14. Barbox Brothers 「バーボックス商会」 > 「マグビー・ジャンクション」(『クリスマス・ストーリーズ』)
 15. The Boy at Mugby 「マグビー駅のボーイ」 > 「マグビー・ジャンクション」(『クリスマス・ストーリーズ』)
 16. Sikes and Nancy 「ナンシー撲殺」 > 『オリヴァー・ツイスト』
- 以下5作は台本が準備されていたが、結局一度も公開朗読には至らなかった。
17. The Haunted Man 「憑かれた男」
 18. The Bastille Prisoner 「バスティユ監獄」 > 『二都物語』
 19. Great Expectations 「大いなる遺産」
 20. Mrs. Lirriper's Lodgings 「リリパー夫人の下宿屋」 > 『クリスマス・ストーリーズ』
 21. The Signalman 「信号手」 > 「マグビー・ジャンクション」(『クリスマス・ストーリーズ』)

(14) 梅宮創造「ディケンズと公開朗読」p.2.

(15) Forster, John, *the Life of Charles Dickens*, Everyman Edition (London: J. M. Dent and Sons, 1969). Book Eighth: Public Reader.

SUMMARY

This paper deals with the first half of Dickens' last period, while he has three periods as a writer: early, middle, and last ones. Christmas stories, which had been very popular in his middle period, were written every Christmastime with less quality throughout the last period for the two monthly magazines, edited by himself, with many co-writers. They are surveyed critically in the light of his journalistic career, his way of writing stories, and his personal events.